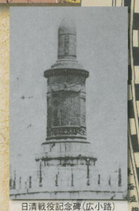
がんばれ名古屋商人！

明治時代版

左図「府県聯合共進會記念　名古屋現勢地圖」(明治43年名古屋新聞社發行)　　中図「名古屋市中央部営業案内地圖」(明治42年編輯兼發行者三共社守谷耕策)　　右図「名古屋概要地圖」(大正3年扶桑新聞社發行)

左図および中図は、地図記載の明治時代の施設・会社が黒文字になっていた。著者が記載したのは青文字もしくは緑文字である。場所を特定できなかった場合は、その周辺にあるという意味で「?」と記した。
右図は、地図記載の大正時代の施設・会社が赤文字になっていた。著者が記載したのは青文字もしくは緑文字である。

日露戦争凱旋門（広小路本町）【中図49】



日清戦役記念碑（広小路）【中図40】

豊田佐吉は慶応3年生まれだから、明治の元号と同じ年齢になる。明治27年に名古屋に出てきて、朝日町1丁目12(中図31)で糸綛返機の製造販売を行う「豊田式撚糸伊藤商店」を創業したが、その場所は錦3丁目6（興和本社）の近辺、那古野1丁目66(中図32)に移転したが、その場所はデレビ塔のあるブロックの南側近辺だと推定される。そこで信じていた伊藤氏が相場で失敗して、佐吉もどぼっちりを受けた。豊田商店に改称して自ら経営を始めた。明治30年に武平町3丁目15(中図34)に移転して、300坪の工場で動力織機の製造販売を始めたが、その場所は東区泉1丁目の3号ビルの辺を指して良い。明治38年に西区島崎町で織機製作工場を新設したが、それが現在のミトラシドスクエア（中図1）である。大正元年に西区則武新町で豊田自動織布工場（豊田紡織の前身）を設立したが、それが現産業技術記念館である。事業に成功した後に建てた家（右図1）は東区白壁1-17で、現在ダイキン工業になっている場所。

トヨタ自動車の創業者・喜一郎は、佐吉の長男として明治27年西区で生まれた。発明に熱中する佐吉に愛想を尽かした母「ちか」は、喜一郎を残して実家に戻ってしまった。喜一郎の3歳の時、佐吉は名古屋に家を構え、再婚した。から始少時の居住地は武平町3丁目15(中図34)というところになる。高岳尋常小学校（現東桜小学校）、旧制明倫中学（現県立明和高校　当時も場所が異なり現在の鳥立商業高校　右図10）で学ぶ。大正2年、明倫中学の4年生の頃、喜一郎は上級学校への進学を望んだが、高等教育にあまり期待と関心を持たない佐吉との間で意見があった。東京中たった女生工場（左図10の東区泉1丁目の3号ビルの辺りにあった）を見学させるなどという心くばりも行っていたという。その後東大工学部へと進学した。卒業してからの家は右図8だった。なお、豊田自動織機製作所の初代社長・利三郎（右図4）は、喜一郎の異母弟（妾子）の婿。その利三郎邸の向かいニーの盛田昭夫氏（右図5）だった。

松坂屋の伊藤次郎左衛門家は慶応2年、祐昌（すけまさ）が14代次郎左衛門を襲名、祐昌は明治11年に名古屋博物館兵（中図63）に就任。14年には名古屋商法会議所の初代会頭に就任。同年伊藤銀行を設立、45歳には（株）いとう呉服店を設立し、その翌年（すけたみ）が社長に就任。米屋町（中図18）から出て、栄町（現丸栄スカイル　昔の名古屋市役所の跡地　中図42）で名古屋初の本格的なデパートをオープン。現本店の南大津通に移転したのは大正14年。

岡谷鋼機の岡谷家（中図52）は、9代目**勘助**が幕末から明治にかけて活躍。慶応3年に家督相続し、金属類の需要増大を予測し、古銅材などを在庫し、安定供給する体制を作り上げたことが機銃時に利益を生む礎になった。明治4年に愛知七宝会社を設立し、ワイーン万国博覧会に出品するなど世界にに宝焼を輸出し、貿易の先駆者になった。伊藤祐民は、この代目勘助の娘ていと結婚。伊藤家と岡谷家は婚姻関係にあった。

奥田正香は、**明治時代の中部財界の巨頭**で「名古屋の渋沢栄一」と呼ばれた。尾張藩士の子として額屋上野村（千種区茶屋ケ坂公園）で誕生。名古屋に戻って宮町（中図27）で奥田商店を開き時雨堂油の販売を始めて成功。明治26年に名古屋商業会議所の会頭になり、大正2年まで8年間在職していた。明治銀行を明治29年に設立して頭取就任。日本車輌製造を設立して初代社長に就任。名古屋証券取引所（中図43）の理事長に就任。福男生命（右図45）も設立。が、熱田伝馬町にあった遊郭を、福永新田に移す計画で疑獄事件に巻き込まれて辞任。小山温に敷設されることになった鉄道を、東海道を通るよう仕向けて、名古屋はおろか、愛知さえ知らない鉄道を作ろうとしていた。などの数々の逸話がある。

澁谷古衛門商店（現タキヒヨー）は、4代目**兵右衛門**が明治8年に本町（中図20）に土地を購入して名古屋進出。4代目は明治15年に名古屋銀行（中図17）を設立して初代頭取に就任。同銀行が取り付け騒ぎに遭った際には私財を投じて資金を集めた。明治45年に（株）澁兵商店を設立して、初代社長に5代目の信四郎が就任。南組・油屋町2-2に2千坪の豪邸（中図70）があり、池が3箇あり、鶴まで飼われていた。

瀧定は、初代の**定助**が天正元年から東方町に住み、呉服太物卸商を営み始めた。慶応3年、2代目の滝兵右衛門から財産分与を受けて独立。明治22年に製造部門として「西新町」創定商工場（中図38）を開設。明治39年に東海倉庫（中図58　その後名古屋倉庫と合併して現東陽倉庫）の設立に尽力。初代は明治36年に死去し、長男が2代目定助になった。2代目は明治39年に鑑定会資金を設立。本店は東方町3丁目（中図15）。現本社所在地（中図51）に移ったのは昭和11年のこと。

村橋木材の創業の地は（中図87）で、針屋町（中図30）の酒造業・日比野茂兵衛の長男だった茂三郎を、養女のユ(名古屋木新信託の父)の縁談千に迎え、彼が明治31年に**名古屋木材共商**にな った。7代目より上前津の別荘（現門脇邸（中図66）、8代目は明治31年に愛知時計電機（右図6）を設立すると同時に社長就任。関与した会社は、日本車輌製造、愛知木材、名古屋倉庫、名古屋瓦斯などと数え切れない。名古屋市会議長も務めた。奥田正香の後を受けて大正2年に名古屋商業会議所の会頭に就任。

「**日本の電力王**」と呼ばれる**福澤桃介**は、慶応義塾の先輩である矢田績に招かれ、名古屋電燈（中図54）の婿を明治42年に迎いむかえて名古屋に乗り込んだ。名古屋ホテル（中図9）で矢田績、下出民義らと協議しての行動だった。名古屋電燈には矢田が中心となって設立した公共事業で、桃介はこの経営陣より対立。桃介が推進したる古屋電燈と名古屋電力の合併は、東京電（中図68）を全場にして譲歩したが、矢田が譲歩しての合併は許せないと、桃介は辞任。名古屋電燈は、桃介はその後電気事業法に就任してが